



【小特集「第三の新人」再考：「戦中派」の思想と作品】安岡章太郎からみる「第三の新人」

安藤，陽平

(Citation)

國文論叢, 62:62-75

(Issue Date)

2025-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100498113>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498113>



■小特集 「第三の新人」再考——「戦中派」の思想と作品

安岡章太郎からみる「第三の新人」

安藤陽平

はじめに

阿川弘之の死に際して「第三の新人」は私だけになった（『文芸春秋』二〇一五・一〇）と追悼文を寄せた三浦朱門も、その後一年半経って亡くなった。「第三の新人」がみな鬼籍に入ったことになる。

「第三の新人」という分類は、山本健吉「第三の新人」（『文学界』一九五三・一）ではじめて使用されて以来広く流通してきた。¹近年でも『三田文学』（二〇一四・八）や『群像』（二〇二一・三）などの文芸誌、学会誌の『昭和文学研究』（二〇一六・三）が「第三の新人」特集を組んだ。『第三の新人名作選』（講談社、二〇一八）も刊行されている。グループの成員には曖昧なところもあるが、安岡章太郎や吉行淳之介、庄野潤三、遠藤周作といった「戦中派」世代を多く含む分類として認識されている。

その内実を具体化したのは、服部達「新世代の作家たち」（『近代文学』一九五四・一）および「劣等生・小不具者・そして市民」（『文学界』一九五五・九）だとされる。内容は後述するとして、

今なお支持を得るこれらの論に寄せられた批判を先にみておきたい。上坪裕介「多種多様な作家たち」（『三田文学』前掲）は、庄野潤三を軸として服部の分類分析を批判的に検討し、「彼の「第三の新人」論が安岡の作風に寄りすぎた評言であることは明らかであり、とりわけ庄野潤三に関しては違和感のほうに立」つと述べる。服部は後発の「劣等生・小不具者・そして市民」で安岡を「第三の新人」の原型」に位置づけたが、そこでは庄野の実態が取りこぼされているという批判である。これを突き詰めていくと、川嶋至「第三の新人論」（紅野敏郎ほか編『現代文学講座6 昭和の文学Ⅱ』至文堂、一九七六・一）が指摘した「集団の枠と特色を剔出しようと試みれば試みるほど、結果は収斂の方向をたどらずに拡散してしまう」という「第三の新人」論の困難に行き当たることになる。

それは分類分析一般につきまとう難点なのだろうが、しかしその成員や共通性の検討だけが「第三の新人」論でもないはずだ。たとえば上坪のように、個別の作家を事例として分類の定義を精査したり、新たな知見を示したりすることは可能である。それに

加えて、作家とこの分類の関わりを探るといふ論点も挙げられる。成員さえ曖昧で妥当性を疑うこともたやすい「第三の新人」だが、それが流通して残ったのは事実であり、彼らの著作にも分類関連の内容が散見される。分類と関わって送られた作家生活に注目し、いわば生きられた「第三の新人」を明らかにすることもこの分類に関する論考たりうると考えられる。

本稿では安岡章太郎を拠り所として、右に示したふたつの論点にもとづいて「第三の新人」を分析していく。服部が「第三の新人」の「原型」としたように、安岡はこの分類の代表的な作家である。しかし、その安岡の小説でさえ「第三の新人」論と対照させると異論の余地がある。さらに、安岡は分類と関わる発言を比較的多くのこうした作家でもあるため、本稿の分析にふさわしい対象だと考えられる。

一、〈日常〉と〈政治〉

まず従来の「第三の新人」論の検討からはじめる。そこでは、序節で挙げた服部のふたつの評論が支持されてきた。服部は初発の「新世代の作家たち」で、安岡や吉行など一〇名の作家をとりあげ、「ビーターマイヤーの様式的優勢」・「戦後派作家との対立」・「素朴実在的リアリティへの依存」・「私小説的伝統への接近」・「批評性の衰弱」・「政治的関心の欠如」という六項目の共通性を導出した。並列されてはいるが、これらは前世代の「戦後派」と比較した場合の傾向であるため、分析の根幹をなすのは「戦後派作家との対立」である。同項の説明には、「新世代作家のさまざまな特色——即物性・日常性・生活性・現状維持性・伝統性・抒情性・単

純性・単調性・私小説性・形式性・非倫理性・非論理性・反批評性・非政治性等々の傾向は、すべて従来の戦後派作家の基本的な諸傾向と対立するもの」とある。続く「劣等生・小不具者・そして市民」は、まず「第三の新人」らしい「第三の新人」として安岡・吉行・三浦・庄野・小島信夫・小沼丹・曾野綾子を選出する。そして服部は、七名の共通性として「卑小なる自我という觀念、ならびに心理主義的な作風」を指摘し、それを最初に見出した安岡を分類の「原型」とした。

序節では、各作家の個別性を掘り切れていないという服部批判を確認した。ここではそれに加えて、佐藤昭夫「第三の新人」の評価（三好行雄・竹盛天雄編『近代文学7 戦後の文学』有斐閣、一九七七・七）の批判を参照する。佐藤は、「第三の新人」が描く「日常」を「極限状況の中の日常性」とみて、「〔極限状況〕は「戦後派文学」の最大の表象」であることから、「服部や奥野健男が強調するほど、彼らは戦後派離れしているとは言えぬ」と指摘している。「第三の新人」はまた一面で第三次戦後派としての側面を持つことは、むしろ自然」とも述べる佐藤からすれば、「従来の評価は両者の対峙性を強調しすぎ」ているのである。

批判の内容もさることながら、それが「日常性」をめぐってなされたことも意義深い。この点こそ「戦後派」と好対照をなすものだとみなされてきたからである。たとえば上坪「多種多様な作家たち」（前掲）は、「政治や思想といった観念的なものを信じず、身近な生活の細部を描いた作家として庄野を読み、その「日常生活における実感を唯一信じるに足るものだとする認識」が「第三の新人」の共通性だと論じる。服部に批判的な上坪も、「政治や

思想といった観念的なもの」と「身近な生活の細部」・「日常生活における実感」を対比する点で、服部以来の「戦後派」／「第三の新人」という対立をなぞり、再生産している。そこで彼らの「日常性」は、「政治や思想といった観念的なもの」を脱色された「細部」・「実感」として、つまり反「戦後派」的なものとして読まれることになる。

もっとも、「日常」・「政治」・「思想」はどれも曖昧なので、元をたどって服部の論を見返すと、まず「思想」はほとんど論及されていない（三節でみるように、「第三の新人」を「非思想的」と書いたのは十返肇）。「日常」に関しては、小説の素材に「日常的生活」が多く、戦場など非日常的な状況を描くにも「日常生活の延長」としての面に焦点が当てられると指摘がある。「政治」は「政治的関心の欠如」の項目があり、マルクス主義思想や社会的事件のような、いわば大文字の政治への関心が乏しいとされている。安岡が「ガラスの靴」（『三田文学』一九五二・六）などで描いた占領下の物語は「政治」といえそうだが、「日常生活の延長」だというのだろうか。

多くの先行論も服部とほぼ同義でこれらの概念を使用したきたが、「日常」にしろ「政治」にしろその指し示す範囲が狭隘ではないか。とりわけ、彼らの文学をいまあらためて検討する場合、「政治」がただちに大文字の政治を指す同時代性を引き受ける必要もないだろう。評価の歴史は踏まえるべきだが、それを相対化しない限り、彼らの文学は「戦後派」と対立する「非政治」的「日常性」の文学という評価から進展しない。現代では、「個人的なこと」は政治的なこと」という標語が示すような、日常と対立するので

はなくそれと絡み合う小文字の（政治）という観点がある。従来
の「第三の新人」論では、こうした概念の更新以前に、政治の語
をもって彼らの文学を語ることさえ忌避されている感がある。し
かし私見では、少なくとも安岡の小説で描かれるのは、（政治）と
絡み合った（日常）なのである。³以下、「第三の新人」と呼ばれは
じめた時期の安岡の小説として、服部が「新世代の作家たち」で
触れた「宿題」（『文学界』一九五二・二）、「愛玩」（『文学界』一
九五二・一一）、「蛾」（『文学界』一九五三・二）、「陰気な愉しみ」
（『新潮』一九五三・四）、「剣舞」（『文学界』一九五三・七）を例
にそれを論じてみよう。⁴

服部が安岡をグループの「原型」としたのは「劣等生・小不具
者・そして市民」においてだが、その「卑小なる自我という観念、
ならびに心理主義的な作風」という見解は、安岡に関する限りで
はすでに「新世代の作家たち」で示されていた。ゆえに、右の小
説を分析する服部の主要な論点も「自己の卑小化と外部世界の卑
小化」にある。しかし、安岡の小説が卑小な物事で構成されてい
るのは、一目みればわかることではない。みるべきは、その卑
小さがどのようなものとして描かれているかということだ。

弘前から東京の進学校に転校してきた「宿題」の「僕」は、ま
ずその「四国弁と東北弁と植民地言葉のこつちやになつたナマリ」
によって有徴化されている。そのうえ、弘前にはなかつた宿題と
いう慣習にも悩まされることになる。本作での宿題は受験制度が
もたらすものであることから、それがない弘前は受験（立身出世）
から疎外された周縁である。「五年の一学期がやつとをはらうとし
てゐる所なのに、南学校ではもう六年級の学科にとりかかつて

る」という東京／弘前の教育格差もそこから生じてくる。「田舎」からやってきた「僕」は、宿題をやるうにもできないのである。「僕」の劣等生たる日々には、言語と知における中心／周縁の格差が根差している。

「愛玩」「剣舞」は、いずれも敗戦後の貧窮する家庭を描く小説である。「愛玩」における逼迫の起源は、父が南方からの引き上げ以後外出しなくなり、「僕」は「兵隊のときにかかった脊椎カリエス」で病臥していることにある。そしてその状況を加速させるのが、あるとき父が連れ帰ったアンゴラ兎である。予定では、その毛の収穫で家計改善が見込めるはずだった。他方、家族でひとり「わるい予感」を抱く「僕」は、兎の鳴き声に「陛下のお声をはじめラヂオできたときのやうな、ある空」さ」を感じている。そこからは、「月々八千円まうかる」として威光を放っていた兎（陛下）に対する幻滅の過程があるのみである。貧窮を見据えるまなざしが、戦争およびその遂行者としての「陛下」をその要因のひとつとしてとらえている。

「剣舞」の父も元軍人で引き上げ経験者だが、焦点が当てられるのは父性の喪失である。十数年家を空けていたことに加え、復員してからの父は一向に家計改善の戦力にならない。しびれを切らした「僕」が米軍接收家屋のガード職を父に見つけてくるも、やがて解雇される。些細な原因だったため事情を聞きに行った「僕」は、「セキユリティー・オフィサー（保安将校）の命令ですから」と「ひと言も口をはさむ隙がないまま」帰され、その「金属的な声」が頭にしみついて離れなくなる。ふと「僕」は、父の仕事を周旋してくれた友人Kに会いたくなくなり、食事することになった。

主人のC中佐に連れられ渡米予定のKが日本食の店を選び、「僕」にも豪勢にふるまうと、不意に「僕」の目から涙がこぼれる。それはおそらく、渡米する人間と、些細なことでもクビにされ機械的な対応でいなされた「僕」たち一家との対比がもたらしたものである。そしてそのとき、ラヂオの音楽が「僕」に「赤ん坊を背負った白ハチマキの剣士」による剣舞を想起させ、父や母、幼少期の「僕」が「剣士」に重ねられていく。この音楽が「暗いドイツ語の歌」なのは暗示的で、剣士Ⅱ一家の苦悶が敗戦国に降り立った新たな（父）の影響のもとに提示されるのである。

「傷痍軍人として恩給を受ける」「陰気な愉しみ」の「私」は、自身の稼得能力に「劣等感」を抱く人物である。「劣等感」は、給付係の職員が自分をイカサマ扱っていないかと「私」を疑心暗鬼にさせる。一方で、そのときの「私」が少女職員の「射るやうな視線」に反応し、さらには想像上で彼女の凌辱を試みるように、「劣等感」は男らしさにまつわるものである。クライマックスをなす靴磨きの場面は買春のメタファーとして読みうるもので、男としての「劣等感」を払拭しようという「私」の欲望が発露する場面である。男性ジェンダーの階層性に加え、そこに絡め取られた人物が他者を蹂躪し、優越化を図るところまでが描きとられている。

「蛾」では、医者診断がもたらす「恥」と「不愉快」を語る。「私」が描かれる。心配で医者に診てもらったのに何でもないといわれると、「聯隊長の前でロクナ手柄もたてられなかつた兵隊のやうに」恥じ入るといふ「私」は、権力の視点から医者との関係をとらえている。「不愉快」は、「内部を覗かれるやうな気がするから」とあるが、医者「科学的」説明を「私自身にはどうなるも

のでもない」と棄却していることを考え併せれば、自身の「内部」や個別性を重視する「私」のありようが浮かび上がる。その「私」の耳に、一匹の蛾が入り込む。当初は七転八倒するも次第に親しみを抱くようになり、さながら「内部」に宿るもうひとりの「私」として蛾が描かれていく（蛾という字の旁は「我」。あるとき「私」は「もつと醜態で、もつと下劣なこと」をこの蛾にみせてやろうと評判の悪い医者にかかる。すると蛾はすぐに飛び出し、実はそれが「長さ二三分の小さな蛾」でしかなかったと判明した挙げ句、弱々しく墜落してしまう。ここで「私」が感じる「ウソ寒さ」は、「蛾」（「内部」）の卑小さのみならず、先の「恥」とも関係している。「私」はこの小説を「私のやうなくだらない男にしか起りえない事件」と前置き、結末に関して「つまらな」と卑下するが、そう思わせる一因に医者、ひいては「科学」の権力を握るのがこの小説なのである。

卑小な人物を描く安岡の小説には、その卑小さの由来もちりばめられている。それを丹念に拾い上げていくと、卑小さを作り出す（政治）の存在が浮かび上がり、小説に描かれる彼らの（日常）はそれと交錯するものとして立ち表れてくる。だとすれば、それは「戦後派」の描く「政治」と対立するものではない。むしろ彼らの「政治」と繋がる回路としての（日常）がそこにある。

二、「第三の新人」としての安岡章太郎

本節からは安岡と「第三の新人」という分類の関わりをみていく。安岡が分類を話題にした文章では、「第三の新人」といふこと（「群像」一九五八・九）が早い時期のものである。そこで安

岡は、分類されたことに次のような反応を示している。

それにしても、自分が知らないうちに、ある分類された項目の中に組入れられてゐるのはフシギな気持だ。／僕たちの間で、さういふ意味の抗議を真つ先に持ち出したのは小島信夫であるが、僕らは自分がきめるより先に、僕らの文学の方向なり、資質なりを、外側からきめられてしまった。これは何も僕らにかぎつたことではなく、僕らのあとから来た「太陽」派や「才女」派もさうだらうが、批評家ジャーナリズムはしばしば僕らの作品をではなく、僕らを、一定の尺度を切つて分類したワクのなかへ押しこんで、その上に立つて好き勝手な判断を下し、論評を加へてゐる。

小島「分類——「第三の新人」とよばれて」（『朝日新聞（朝刊）』一九五四・一二・二二）は、分類することの暴力性に言及し、「第三」という言葉を聞くと、ちよつと寒気がするくらいになつていた」と分類された側の「悲しみ」を表明した。そこまでではないにしろ、安岡もまた分類されたことに感慨を抱いていた様子が右の引用にうかがえる。「文学の方向なり、資質なり」を「外側から」規定してくるものとして冷やかに分類をみつめ、「僕らの作品ではなく、僕ら」に対する強引な分類、恣意的な論評への不満を安岡は述べている。

「批評家ジャーナリズムは」と安岡が書くように、その強引さや恣意性にはジャーナリスト的な欲望が関わっている。すでに川嶋「第三の新人論」（前掲）などに言及があるので要点のみ確認

すれば、「第三の新人」という名称・分類の初出は山本健吉「第三の新人」(前掲)だが、それは『文学界』編集部が特に深い考えもなく作ったものだった。のみならず、『文学界』はその同年(一九五三)に新人たちの会合を企画・開催した。この「二二会」には、作家から安岡のほか吉行・三浦・小島・庄野・武田繁太郎・島尾敏雄・五味康祐・結城信一・近藤啓太郎、批評家から進藤純孝・日野啓三・奥野健男・村松剛・浜田新一が参加したとされる。後に「第三の新人」と呼ばれる作家が多いが、この人選にも『文学界』が関与したことから、同誌は彼らの親しい交遊をも促したのだった。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

先行論への付言として、「座談会 濃密な季節」(進藤「文壇私記」集英社、一九七七・一一)における安岡の発言を挙げておく。安岡によれば、「二二会」は「座談会 新人作家文学を語る」(『文学界』一九五三・一)を契機に企画された。座談会に批判が集まり、「文学界」編集部の態度が硬化して「意地になって肩入れしてくれだ」結果、「二二会」が発案されたのだという。座談会は奇しくも山本「第三の新人」と同号の掲載だが、『文学界』はこうして「新人」に紙面を割きつつ、「肩入れ」もしていた。後に懸賞評論のテーマとして「第三の新人」を設定したこともある。⁽⁷⁾ 同時期、佐々木基一は「新人の登場し方が戦争直後と昭和二十五年以後とはずいぶん違ってきた。ジャーナリズムが一応新人を軌道の上に乗つけてやって、ジャーナリズムのコースの上で育ててゆくというやり方をとっていると思うんです。〔第三の新人〕は」新人を売出そうという気構え、意図に乗って出てきたところがあるんじゃないか」(「座談会 第三の新人・戦後・平和論」『改造』一九五

五・二)と分析していた。出版の活性化に伴い、ジャーナリズム全体が「新人」を欲望していたなかで、『文学界』は彼らの台頭を後押しした代表的媒体であろう。⁽⁸⁾

「第三の新人といふこと」に戻れば、安岡は自分たちと似た境遇の作家として「太陽」派や「才女」派を挙げていた。特に「太陽」派については、石原慎太郎「太陽の季節」(『文学界』一九五五・七)がブームを巻き起こす過程にジャーナリズムが関わり、石原をスター化したことがよく知られている。十返肇「文壇」崩壊論」(『中央公論』一九五六・一二)はこの現象に、「意識的に一人のスターを売り出す、あるいは売りものにしようとするジャーナリズムの商業主義の完全な勝利」をみたが、「一人」ではなく「スター」にもならなかった点を除けば、「第三の新人」をめぐるその前哨戦がおこなわれていたといえるのではないか。

一方で、このように不満を表明しつつも、彼らはこの分類を無視したのではない。安岡の場合、たとえば庄野のアメリカ留学中(一九五七・五八)に、「第三艦隊沈没せんとす。早く帰国して戦列に加わってくれ」と手紙を出したことがある(庄野「文学交友録」新潮社、一九九五・三、引用は新潮文庫版、九九・一〇)。庄野は、「丁度そのころ有力な新人が登場して、そのいきのいい新人のおかげで、世にいう「第三の新人」がすすんでしまったからだろう」と安岡の心中を推察している。同時期がグループにとつて厳しい状況だったことは、吉行「私の文学放浪」(前掲)にも回想がある。五三年の安岡を皮切りに、彼らが立て続けに芥川賞を受けた時期から「第三の新人」にたいする悪評が、しばしば新聞・雑誌に見られるようになり、五七年ごろには「まさに悪評紛々

たるものがあつた」という。吉行は、「第三の新人は、第一次戦後派と石原たち新勢力に挟撃され、その谷間に消え去るであろう」という意味の発言が、座談会でなされたりした」例を挙げる。しかし当時、小島・庄野は留学中、「島尾は夫人の付添で精神病院に入つて」いた。そのうえ「同年代の批評家からの援護射撃も得られ」ず、吉行は「困つた時期であつた」と振り返っている。彼らの文学を細かく検討した服部達は五六年はじめに自裁していた。

吉行は、当時「構想の会」も安岡、遠藤と三人だけのことがあつた」としているが、安岡「僕の昭和史Ⅱ」（講談社、一九八四・九）でもこの時期の会に言及がある。参加者が減り「ずいぶん細かいものになつて来た」が、「かえつて、僕らは意地になつて」月一回の集まりを継続した。吉行に同じく、この箇所の前後で安岡が書いているのも「第三の新人は全員消えてなくなるだろう」という世評の存在である。そしてそこには、「その頃ますます悪化してきた母親の病氣のこともあつて、最も気が滅入つて」いたという安岡の個人的な事情も加えられている。文壇での競争を戦争に見立て、「第三艦隊沈没」の危機を回避するため庄野に「戦列」に加わるよう呼びかけた安岡の手紙は、こうした状況から発せられた。窮地に立たされ、個人的事情も抱えた安岡は、「第三の新人」たちとの連帯に救いを求めたのだろう。ジャーナリズムに用意されたとはいえ、彼らにとつては生き延びるための拠点ともなつていた様子がかがえる。

右の手紙は内輪向けであり、彼らの親しさを示す性格が強い。だが安岡は、グループへの批判に応じて仲間の弁護に立つこともあつた。花田清輝「第三の新人のユーモア」（上・中・下、『東京

新聞（夕刊）』一九六〇・一〇・七〜九）は、遠藤「おバカさん」（『朝日新聞』一九五九・三・二六〜八・一五）、吉行「すれすれ」（『週刊現代』一九五九・四〜一二）および『続・すれすれ』（講談社、一九六〇・一）、阿川「ほんこつ」（『読売新聞』一九五九・九・一二〜六〇・四・二五）におけるユーモアのありようを批判した。「二十世紀の後半期におけるユーモアは、インターナショナルな眼で、ナショナルなものをながめるところからうまれてくるのではないか」（『下』）との考えから、遠藤らのユーモアはナショナルリズムに根差した批判対象とされたのである。

これに対し、触れられてもいない安岡が「第三の新人」から花田清輝氏へ」（上・中・下、『東京新聞（夕刊）』一九六〇・一〇・二九〜三一）と題して応答した。「上」の冒頭、まず安岡は「戦争中につくられたものは、どうも評判がよくない」と書き起こしている。特に兵器では「九九式短小銃」というのは古兵からは相手にされ」なかつたとし、「文壇でいう『第三の新人』——つまり僕らのことであるが——は、大体においてこの『九九式』とみなされているわけだ」と分析する。戦争中に精神形成した「戦中派」であり、批判されがちである点で、「九九式」と「第三の新人」を重ねている。そのうえで安岡は、花田を「古兵」に位置づけ、「九九式」に「イラ立っている」上の世代の感情としてその批判を解釈する。「一級上の先輩」／「第三の新人」という世代間対立の構図が敷かれ、仲間かつ同世代の者としての反論という構えがとられている。

安岡は、花田の批判を「ナショナル」印のハンコをぺたぺたと三つ押しただけの「インズウによって片づけられた仕事のようにだ」とする。ナショナルリズムという基準で作品を切つたに過ぎな

いという反論である。たとえば遠藤への批判について、「おバカさん」の中に、日本的ナショナリズムを見出そうとすることが僕にはそれほどイミのあることは思えない」（「中」と安岡は述べている。その一方で、「バカ」ですむところを、わざわざ「おバカさん」とした一点に花田が注目したことを評価し、安岡はそこに「遠藤の大ウソつきだという点」を考慮して「この題名で彼が何をゴマ化そうとしたか」を考えるべきだと進言する。安岡によれば、遠藤は同作を通じて「カトリックを布教しようとして」「おバカさん」というタイトルは「その目的をヒタかくしに」するためのユーモアなのだという。「小説というものの、リテラチュアーと呼ぶ観念そのものがキリシタンの国々のものである以上、何とかしてキリストをわがくによばないかぎりは、わが文学はわれわれの国土に根を下ろすことにはついにできない」という「年来の遠藤の持論」を汲んだ解説である。阿川にはさして記述がないが、吉行に関しては、「好色漢」ゆえにその「色道小説」につきまとう「ナマ臭いもの」を「ゴマ化そうとしてのユーモアを彼は考えている」と安岡は述べている。

遠藤・吉行のいづれについても、それぞれの目的や背景からそのユーモアが解説されている。外的なひとつの基準で作品を裁断する花田に対し、安岡は個々の作家・作品に依拠した分析の必要性を説くのである。そして、それが「一級上の先輩」／「第三の新人」という構図でなされていたことを思えば、花田のみならず「いかにもわれわれのすぐ一級上の先輩をホウフツとさせ」るすべての「第三の新人」批判にこの反論が向けられていると解釈できる。それはたとえば、「政治性」等がなく「小市民的」だとする、前節

でみたような「戦後派」基準の批判である。安岡はそれに「第三の新人」本人として反論したのであった。

それにしても、なぜ名前も拳がっていない安岡が弁護に立ったのか。花田は注文を受けたと書いていたが（「上」、安岡もそうだったのか。いづれにせよ、吉行が書いていたように、彼らは代弁者となる批評家をもてなかった¹⁰）。その状況は、服部の自裁から彼らが代表作を発表するようになる六〇年前後まで続いたと考えられる。代弁者不在の切迫した状況で安岡は、「第三の新人」であることを引き受け、「第三の新人」として反論を表明したのである。

三、「思想音痴」の〈思想〉

吉行の回想にあつたように、初期の「第三の新人」には否定的な評価が少なくなかった。継続的な批判者のひとりだった十返肇は「文壇主流の喪失」（『中央公論』一九五三・一一）で、「安岡章太郎の世代」の「新人」たちについて「堀田（善衛）の世代とくらべて、私が彼らに感ずるのは第一に思想性や社会的感覚の薄弱さである」と述べた。それは「軍国主義時代に、少年期から青年期への過渡期を送つた彼らが、マルキシズムとの対決を体験したこともなく、転向といふやうな現象についても、まったく知るところもないといふ事実」によるものだと十返は分析する。「第三の新人」の語はみられないものの、翌月に発表される服部「新世代の作家たち」とも重なる内容である。十返はその後、これを明確に「第三の新人」の欠点とするようになり、「彼らの文学は、戦後派とは逆に非思想的であり非政治的であり反批評的であり、また反社会性格を所有している」（『第三新人論』、『東京新聞』一九五

四・五・八」と繰り返し批判した。

こうした批判に対して安岡は、とりわけ「思想性」という概念を断続的に話題とした。「思想音痴の擬装」(『文芸』一九五七・一)では、まず自分は「思想といふ言葉を理解してゐない」と述べ、「金田一京助氏の『明解国語辞典』を参照している。(一)かんがへ。おもひ。(二)心)思考作用から生じた意識の内容。(三) 実際生活と密接に関係し、これを支配・統一する広い考へ方」という説明がみつかるも、「かんがへ。おもひ」のほかのこととはよくわからない。しかし、「思想とは何のことやらわからぬことだ、ではすみさうもない」と安岡は理解を放棄しない。この直後には、「最近、あなたたち『第三の新人』について、思想オンチだといふ声がある」というW君の言葉が引用されている。自分たちの欠点として論られるために、意味不明のままにしておけないということだろう。

安岡はW君の言葉に「思想オンチ？」と返しており、この部分だけ会話形式になっている。W君が「つまり思想性がないといふか、すくないといふのですよ」と言い換えると、安岡は「思想性？」と再び問ひ、「いよいよもつてアイマイモコとした気持」になる。「かういふことがピンとこない」のが「オンチ」なのだとW君が論ず。安岡は、「W君は何も説明はくはへなかつたけれど言葉のニュアンスは字引をひいたときよりも、よくわかつたやうな気がする」と述べる。「思想」とは、「かういふことがピンとこないやうでは、といふ、つまり多分に気分的なこと」を含む曖昧なものだという理解が得られたようである。

次に安岡は、「思想性のある人物」について検討をはじめも、

「それにしても『思想性のある人物』とは何といふ奇妙なことばだらう。ただの『考へぶかい人』ではどうしていけないのか？」と問う。さらに、「考へないであるといふことは、どんな人間にも出来ることではないのだから、ことさら『考へぶかい人』などといつてみるのをかきなごだ」と述べる。人間は「いつ、どんな時にも、考へずにはゐられない」のだから、「考へぶか」くない人は存在しない。この論理から、安岡は「無思想」だの「思想オンチ」だのといふ称号は返納した方が無事であらう」と書いている。

ところが、この文章を収録した評論集は『思想音痴の発想』(芳賀書店、一九六六・五)と題された。あながちイロニーだけでもないようで、同書のとがきで書名は編集者の提案と断りつつ、「思想音痴」とは、なかなか面白い言葉」だとかつての「称号」を肯定的に認識し直している。曰く、「思想音痴」だからこそ可能になる「複雑な型の発想」があるのだという。

あるいは、後に自らの評論を「思想」と称することもあった。『セメント時代の思想』(講談社、一九七二・九)に加え、七〇年代に続々と刊行された文庫『なまけもの思想』(角川書店、一九七三・五)、『へそまがりの思想』(角川書店、同・七)、『やせがまんの思想』(角川書店、同・八)、『思想オンチの思想』(角川書店、一九七四・四)でも一貫して「思想」の語を冠している。文庫の前身は既刊の評論集だが、過去の著作を「思想」としてリパッケージしたとも、あるいはそもそも「思想」だったという認識を表明したとも読める。では、「思想」を「多分に気分的なもの」として批判的に理解した安岡の「思想」とはどのようなものなのか。『思想音痴の発想』(のち『思想オンチの思想』)を対象にそれを検討

してみよう。

「丸山真男氏の「タコツボ文化」説と糞尿処理問題」は、世界で一日に排泄される「クソの量」からその処理方式の話になったかと思うと、「ナポレオン皇帝の時代にすでに今日みるがごとき立派な下水道が完成していた」バリと「水洗便所の処理に一向無関心」な日本が対比され、その「無関心」と「革命の歴史をもたず、自由を尊ばず、いつまでたつても民主主義の何たるかを理解しようとしてない」日本のありようが関わるのではと展開していく。やや唐突に丸山真男の「タコツボ文化」が参照され、「この「タコツボ文化」説は、われわれの糞尿処理にもっとも端的に当てはまるように思う」とされる。すなわち、「一軒一軒の家の便器を地下の太いパイプで結んで流れるパリの下水道は、自由、平等、博愛の思想から生れたもので」、「一戸一戸が個々のクソ溜めを掘って全東京の地表を巨大なハチの巣のような穴で覆ったのは、明治維新以来の国権思想と中央集権化のあらわれではないか」というのである。学問や組織体から「タコツボ文化」を論じた丸山に対し、「学問だの、社会の組織形態だの」は「ちっともわからない」とする安岡は、糞尿処理という日常習慣にそれを見るのである。

「オモチャの兵隊」式「オモチャの国会」では、岡山市で開催された「一日内閣」（国政に関する公聴会）の様子が記される。これは、当時の首相・池田勇人に向けて、公募の当選者が「一般人の「ナマの声」を届ける会だったようである。しかし安岡は、当選者の発言が「やたらと抽象的な題目を、ひどく難解な政治用語を使って、ながながと申し述べ」ていることに疑問を抱く。すると、公募の文言に「個人的な苦情、陳情などは除き」と記され

ていたことに行き当たる。安岡は、「われわれ一般人にとつて「個人的な苦情」を離れて、政府に対してどんなナマの声が上げられるだろう。個人的な苦情、陳情が国政一般の問題とどうつながるのか、あるいはそれらを国政のなかにどう取り入れていくかをきめるのが、内閣のやる仕事ではないのだろうか」と述べている。

これは同会、ひいては時の内閣への批判であると同時に、安岡の〈思想〉の在り方にも通じる箇所だと考えられる。安岡は、社会や政治のような抽象的な話題を、抽象度の高いまま思考しない。その〈思想〉においては、たとえば国際関係における「日本の後進性」が「自分のつかつている日本製の腕時計」から検討される（世界の中で宙ぶらりんな日本）。逆に、糞尿や便所の話は日本の文化様態をめぐる思考へと発展していく。『思想音痴の発想』は、他に安保アモや社会的事件をめぐる文章があったかと思えば恋愛についての文章もあり、話題が多岐にわたっているが、そのどれもが身近で具体的な事柄と絡めた思考に貫かれているのだ。

同書が「思想オンチの思想」として文庫化された際、「思想オンチについて」というあとがきが付された。「私をずいぶん長い間おびやかしてきた」「思想」は、「日常用語とはチョイト格の違った、深遠にして壮重なるひびきをもった言葉」として流通しているが、その意味は「どうもハッキリしない」。「思想」は「隠語」であつて、それが指しているのは「漠然とした或る雰囲気、つまりフィリングとして存在しているだけのものらしい」。これだけなら先の「思想音痴の擬装」と変わらない。しかしこの後、「思想オンチ」と批判された過去を振り返って、「一つのフィリングを共有出来なかつた」ことは「淋しいことに違いない」としつつ、「このよう

なアイマイな、雰囲気ではないような言葉で、文学を、或いは人間を、批判しなければならぬとは、何ということであろうか」と「或る義憤のようなもの」を書きつけている。それは「ウラミゴト」ではなく、「われわれは近代思想ははぐくみ育てて行くうえで、おたがいに意志を通じ合せる共通な正確な用語を、いまだに持ち合せていない」ことの「ナサケな」さと、「将来のことを思い合せ」た際の「危険」を考慮しての「義憤」だとされる。「思想」の「隠語」性を言い募る安岡は、いわば「タコツボ文化」を問題にしているのである。

その「義憤」がいつから抱かれていたかは不明であり、「思想」関連の著作がすべてそれにもとづいて書かれたのかもわからない。いえることは、安岡が開陳する「思想」はたしかに「深遠にして壮重なるひびき」を持つ「隠語」としてのそれではないということだ。先にみた文庫のタイトルで、「思想」が「へそまがり」など身近な言葉と組み合わせられていたことも象徴的だが、安岡の「思想」は「思想」を「隠語」の領域から解放し、「日常用語」として賦活する言語行為だと読むことができる。「意志を通じ合せる共通な正確な用語」の構築としてそれを受け取るとは、「義憤」を措いたとしても可能である。

おわりに

安岡は、一節でみた服部「新世代の作家たち」を指して、「じつはこれが多分最初の『戦中派』論」だったとしている（「ちいさな片隅の別世界」『われらの文学12』講談社、一九六七・二）。用語の登場こそ「座談会」戦中派は訴える（『中央公論』一九五六・

三）を待たなければならぬが、たしかに服部の同論は「戦中派」の世代的特徴に言及していた。服部は「新世代」に共通傾向が生じた背景に「戦争の影響」・「既成作家への反発」・「現在の社会情勢」を挙げ、「戦争の影響」の項で「戦争が彼らに共通に与えた影響は、まづ彼らの精神形成が戦争中になされたという面で表われる」と述べる。これは先の座談会で「戦中派」という区分を提案した大宅壮一の定義——「人間形成の過程」という「一番大事な時期に戦争を経験され」た年代——とも通じるものである。服部は世代を基準に選定したのではないようだが、挙げられた一〇名のうち長谷川・埴・小山以外は「戦中派」といえる。この世代が多く登場したのが同時期で、対象に「戦中派」が増えたのはその結果だろうか。いずれにせよ、その分析が「戦中派」論の様相を呈するのも不思議ではない。

安岡は、服部が「新世代の作家たち」で「彼の同世代の作家たちの弱点を指摘」したとき、「彼自身にも共通した弱点のあること」が意識されていたと読む。一九二三年生まれで四四年に学徒兵として応召した「戦中派」としての服部が、そこに読まれている。そして安岡は、その当時「戦中派」の発言はまだなく、「服部を自分たちの最初の代弁者であるように思った」と述べている。「第三の新人」の親しさもこうした同世代意識に支えられていたのだろうか。というのも、安岡の花田への反論を振り返れば、そこで「第三の新人」を「九九式」になぞらえた安岡には、「評判のよくない」「戦争中につくられたもの」、すなわち「戦中派」としての連帯意識が抱かれていたはずだからである。それは「戦中派」による「戦中派」の「代弁」でもあったわけだが、かつての服部の

役割を安岡が担った瞬間といえはいいすぎだろうか。

批判という点では、十返の「第三の新人」批判も「戦中派」批判と読みうるものだった。「非思想的」「非政治的」などの文言で彼らを批判した十返は、その背景に彼らがマルクス主義に触れられなかったことをみる。「座談会 戦中派は訴える」(前掲)で同じことを遠藤周作が述べているように、これは「戦中派」に関してよく指摘される点である。安岡の〈思想〉はこの批判へのこだわりの先に構築されたものであった。その意味で、「第三の新人」
Ⅱ「戦中派」の〈思想〉とそれを呼ぶことができる。

マルクス主義体験の有無は、「戦後派」作家と「第三の新人」という文学における世代論にも適用できる視点である。野間宏や植谷雄高など、「戦後派」にはマルクス主義の影響を受けた作家が少なくないが、それは「政治性」や「思想性」を高める一因となっている。「第三の新人」は、あくまでもそうした「戦後派」との比較から「非政治」的だといわれたのであって、その場合の「政治」は「戦後派」基準のものである。安岡の小説にそこからほれ落ちる〈政治〉、そしてそれと交錯する〈日常〉を見出した本稿の分析は、「第三の新人」の「戦中派」的特徴の読み直しであった。

ただ、やはり安岡は「戦中派」という分類にも注意を促している(「ちいさな片隅の別世界」前掲)。そうした「人間のタイプを区分けする考え方」は「数多くのものを切り捨てる結果になるだろう」と安岡は書く。あくまでも個に即そうとする姿勢は、遠藤や吉行の「代弁」とも通じるものであり、安岡らしいスタンスである。後に『僕の昭和史』(三巻、講談社、一九八四・七、同・九、八八・九)の作者となるのも頷けるが、しかし分類分析と懐疑的

に向き合うなかでその姿勢が磨かれた部分もあるのではないか。

「第三の新人」や「戦中派」という分類が何かをとりこぼし、実態を見誤らす危険性があることは何度でも強調されるべきである。しかし本稿を踏まえていえば、これらが流通し今日まで残ったという事実にもとづく分析は可能かつ必要である。彼らの小説を読むとき、分類を参照する必要は必ずしもない。しかしこの分類があったことで読まれてきたこと、読まれてこなかったことは精査する価値がある。本稿では、彼らの描く「日常」が反「戦後派」の文脈で読まれてきたことを確認し、それがゆえに看過されてきた〈政治〉と絡み合う〈日常〉を安岡の小説に読んだ。「戦後派」と「第三の新人」を対立ではなく連続の相においてとらえる視点をそこで示したわけだが、前世代への反発意識を表明し、グループの原型ともいわれた安岡の小説をそう読めるなら、他の「第三の新人」に関しても「戦後派」とのつながりを検討する余地はありと考えられる。

そしてまた、分類と関わって歩まれた彼らの作家生活も、本稿が注意を向けた論点である。分類を冷めた態度で眺める安岡がいた一方で、それを抛り所とし「代弁」する安岡もまた存在し、分類に対する安岡のありようは揺れていた。なかでも、「第三の新人」批判へのこだわりが後の〈思想〉を導いた点では、安岡における分類の意義は小さくない。「第三の新人」があったから後の安岡もあつたといえる部分が確実にある。分類誕生から一〇年も経つとその解体がいわれもしたが、〈思想〉シリーズが七〇年代の発刊だったことを思えば、少なくとも安岡は「第三の新人」を生き続けていたのであり、著作には今もその痕跡が息づいている。

これといった思慮もなくつくられたものであるわりに、「第三の新人」は長生きである。

注

- (1) 山本がとりあげたのは西野辰吉・井上光晴・長谷川四郎・埴英夫・武田繁太郎・伊藤桂一・澤野久雄・吉行淳之介といった作家たちで、今日想起される「第三の新人」の顔触れとは異なる。
- (2) ただし、同論に「第三の新人」という用語はみられない。
- (3) 山本貴光「日常の再発見に向けて」(『群像』二〇二二・三)は、「政治的関心」という言葉の意味や使われ方もかつてとは変化した現代から振り返ると、「第三の新人」の初期作品では「社会のような人間集団に生じる政治こそ扱われていないもの、ある状況の日常において、個人に生じる「自分はないものであるか」という意味での政治に焦点が当てられているのが分かる」としており、本稿の(政治)の捉え方と通じる。本稿では山本が扱っていない安岡の小説を分析したことに加え、山本が専ら現代的な読み直しとして彼らの作品における政治に言及したのに対し、本稿では従来の「第三の新人」論の問題点や「戦後派」との関係の見直しという論点を組み入れて検討した。
- (4) 「宿題」は「学校教育の逆説」(『立命館文学』二〇二二・一〇)、「陰気な愉しみ」は「(男らしさ)の夢と憂鬱」(『日本近代文学』二〇二〇・一一)ですでに論じたことがある。これらを含め、稿者によるこれまでの安岡論は(政治)や後述の(思想)をその著作に読む試みだったといえる。「劣等兵から見出される「希望」」(『昭和文学研究』二〇一六・三三)、「冷戦・劣等意識・人種差別」(『論究日本文学』二〇一八・五)、「安岡章太郎『海辺の光景』論」(『論究日本文学』二〇一九・一二)を参照。
- (5) 吉行『私の文学放浪』(講談社、一九六五・五、引用は「吉行淳之介全集8」講談社、七二・二)によれば、この人選は『文学界』編集部が「芥川賞作家になつたばかりの五味康祐と、島尾敏雄の名は入れてほしい」という「意向」を添え、安岡・三浦・武田繁太郎に依頼した。吉行は三人から助言を求められたが、「結局、最後の人選は、『文学界』編集部がおこなつた。『ほぼ私たちの希望どおり』ではあったが、『しかし、全部ではなかった。編集部は肝煎の役とはいうものの、実質的には主催者に近かつた』とする。
- (6) 『文学界』の影響がすべてとはいえないが、「二二会」で「第三の新人」と一挙に知り合つたという小島のように(私のグループ)『新潮』一九五九・三)、ここで面識を得た作家は少なくない。なお「二二会」は五四年末に『文学界』が手を引き、「構想の会」として続けられた。島尾・小島・近藤・安岡・庄野・吉行・三浦・進藤が残り、新たに遠藤周作・谷田昌平・服部達・阿川弘之が参加したとされ、「第三の新人」の会合という印象が強まっている。
- (7) 当選したのは野島秀勝「第三の新人」(『文学界』一九五五・七)
- (8) このほか『新潮』(一九五五・五)が「第三の新人」小説特集を組み、小島・吉行・庄野・曾野・小沼・安岡・長谷川四郎・松本清張の作品を掲載した。また、「第三の新人」の評価を高めるため安岡・吉行・庄野に長編執筆を依頼した『群像』編集長・大久保房男のような人物もいた。大久保『終戦後文壇見聞記』(紅書房、二〇〇六・五)を参照。
- (9) 吉行はこれを白井吉見の発言としている。「座談会 戦後文学の再検討」(『中央公論』一九五七・五)に、石原や深沢七郎の登場に触れ、「第三の新人」は「置いてきぼりを食うんじゃないか」とする白井の発言がある。

(10) 小田切秀雄『講座 日本近代文学史 第五卷』(大月書店、一九五七・六)も五七年の時点で、「第三の新人」には代弁者となる批評家がいまいと書いている。

(11) 「政治的関心の欠如」をいわれた安岡の同書に社会や政治の話題が多いことには、アメリカ留学経験(一九六〇〜六一)が関係している。野間宏との共編『差別 その根源を問う』(上下巻、朝日新聞社、一九七七・七、同・一一)が代表的だが、留学後の安岡は社会や政治への発言を増やしていった。拙稿「冷戦・劣等意識・人種差別」(前掲)を参照。

(12) 安岡・吉行・三浦・阿川弘之・前田純敬・鳥尾敏雄・長谷川川郎・埴英夫・小山清・武田繁太郎

(13) 「座談会『近代文学』の功罪」(『三田文学』一九五四・三)で安岡は、「『近代文学』の人達がトラクターでパーツとやつてくれた」が、それは強引なやり方で「芽が生えないかも知れない」ので、「もう少し目の細かい奴を、僕達がやつて行かなければならぬ」と発言した。同時に、「あの人達に文学がなかつたと思つている」とも述べている。

(14) 上田三四二「三十年作家」の自己確立(『群像』一九六七・二)は、吉行「砂の上の植物群」(『文学界』一九六三・一〜二)や小島「抱擁家族」(『群像』一九六五・七)など、「第三の新人」の優れた作品が発表された六四〜六五年を分類の解体期とみなした。

【付記】引用は記した書誌に拠った。その際、旧字は新字にあらため、傍点・ルビ・文献副題を適宜省略した。／は改行、「」は稿者による注を示す。

(あんどろ) ようへい／旭川工業高等専門学校助教)